

**所在地** 宮城県利府町春日字硯沢  
**立地環境** 松島丘陵から派生した標高 60～70 m ほどの丘陵斜面  
**発見遺構** 須恵器窯、瓦窯、木炭窯、竪穴建物、火葬墓、木炭焼成坑、土坑  
**年代** 8 世紀前半～9 世紀初頭（須恵器窯）、9 世紀後半（瓦窯）、8 世紀～10 世紀（木炭窯）

## 遺跡の概要

### 規模・構造

硯沢窯跡は仙台平野の沖積地から 3 km ほど北東に入った、標高 60～70 m ほどの丘陵上に所在する（第 1 図）。付近の丘陵上には大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡・中倉窯跡・大貝窯跡などが所在し、春日窯跡群を形成している。硯沢窯跡はその最西端に位置している。古代の遺構は須恵器窯 19 基、炭窯 10 基、竪穴建物 7 棟、瓦窯 4 基、火葬墓 1 基、木炭焼成遺構 36 基、土坑 9 基などが検出されている（文献 15・24・25）。須恵器窯は丘陵北東部の A・B 区と丘陵頂部付近の D 区において、標高 62～68 m の斜面上に立地している。瓦窯は A 区の斜面下方の沢奥部に、同一標高で並列する。炭窯は A・B 区ほか、丘陵頂部の南側斜面・平坦面（E 区）の沢沿いの斜面に分布する。E 区の 2 基は「横口付木炭窯」であり、周辺に製鉄関連遺跡が存在する可能性がある（文献 24・25）。

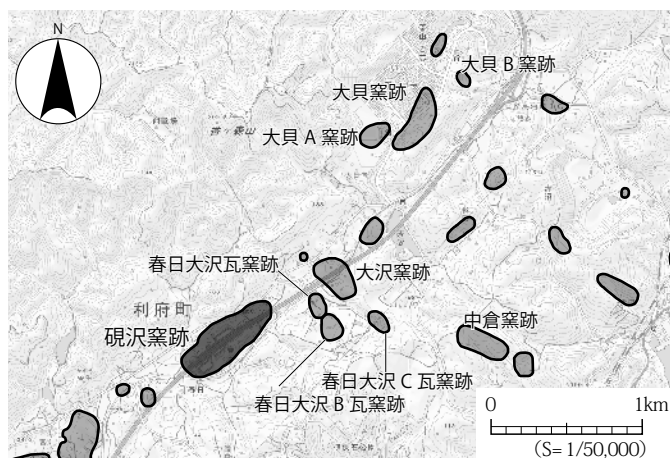
**須恵器窯**（A1a・b、A2、B2～5、B7～10、B14～18、SR131・SR132 号窯、第 2 図、第 1 表）

半地下式窖窯の A1a 号窯と構造不明の B7 号窯を除き、全て地下式窖窯である（報告では A1b・B7 号窯も半地下式とするが、前者は残存深度から地下式とみられ、後者は残存状況が悪く根拠に乏しい）。半地下式窖窯の A1a 号窯は焼成室と燃烧室の区別が不明瞭だが、近隣の大沢窯跡の半地下式須恵器窯と比較すると、燃烧室が長く焼成室の幅が若干広い。壁はスサ入り粘土で構築され、天井も同様とみられる。地下式窖窯の規模は窯体長 5.4～9.1 m、焼成部長 3.6～6.2 m、焼成部幅 1.3～2.5 m、燃烧部長 1.4～3.1 m、燃烧部幅 0.8～1.2 m と多様な数値となっている。平面形態は胴張り形のものが多いが、短冊形のもの（B9 号窯）もある。B5 号窯は前庭部を深く掘り込んだ後、窯体を横方向に掘り抜いている。奥壁のわかるものはすべて直立煙道である。床面の構造には、以下の違いがみられる。

- ・焼成部床面が平坦で煙道方向に 14～27° の傾斜で上るもの（A2、B2・4・8～10・14～16、SR131・SR132 号窯）
- ・燃烧部中・奥部に溝が掘られて階段状になるもの（B3）
- ・床面が全く傾斜しないもの（B17、B18）

**瓦窯**（A4～6、A8 号、第 2 図、第 1 表）

調査区東部（A 地区）の沢沿いに平安時代の瓦窯が 4 基並列している。いずれも半地下式窖窯で、平面形は燃烧室が若干広がる短冊形を呈する。規模は残存全体長が 7.1～7.9 m、最大幅が 0.7～1.0 m である。A5・8 号窯では瓦を用いた焼台の構築や、瓦・スサ入り粘土による床・壁面の貼り替えが認



第 1 図 硯沢窯跡の位置



められる。各窯には外周溝が伴い、その堆積土に十和田 a 火山灰が含まれる。

#### 木炭窯 (A3・7 号窯、B12 号窯、SR101・102・104・105・122・123 号窯)

古代の木炭窯は 10 基が確認されており、SR122・SR123 が地下式横口付木炭窯、それ以外で構造のわかるものは地下式窖窯である。SR101 は平面形が円形を呈し、年代は福島県浪江町朴迫 C 遺跡の類例から 9 世紀後半～末とされる (文献 24)。SR102 は平面形が方形を呈し、出土した土師器坏から 9 世紀後半とされる。SR104 は窯体長 5.06 m、最大幅 1.08 m の地下式窖窯で、奥壁と焼成部側壁に煙道を有する。10 世紀前葉頃の降下とされる十和田 a 火山灰の上層に灰原が形成されていることから、操業時期はこれ以降である。横口付木炭窯では、全容の分かる SR122 は窯体長 8.35 m、焼成部最大幅 1.36 m を測り、焼成部に横口が 6 個付く。SR123 は前庭部から 8 世紀後半の須恵器坏が出土している。切り合い関係をみると、SR122 (横口付) → SR105 (窖窯) → SR123 (横口付) の順に操業が開始されたとみられ、窯構造の変遷は一樣ではなかったことがうかがえる (文献 24)。

**竪穴建物** 7 棟確認されている。いずれもカマドを有するが、位置関係等から窯群と一体の遺構とみられ、廃棄された窯を再利用したものもある (B8 号窯→B2 号竪穴、B14 号窯→B4 号竪穴)。また、B6 号竪穴建物では粘土を貯蔵した土坑が検出されている。いずれも須恵器工人の住居と作業場を兼ねた施設と考えられている (文献 15)。

#### 出土遺物

土師器は坏・甕、須恵器は坏・双耳坏・高台坏・埴・皿・高台埴・盤・高台盤・蓋・長頸壺・水瓶・短頸壺・甕・鉢・双耳鉢・横瓶・獣脚・円面硯・甗・甗が出土している。須恵器坏は体部が急角度で立ち上がり、底部に全面回転ヘラケズリが施されるもの (第 3 図 1) や、体部下部～底部が丸みを持ち口縁部が外反し、底部がナデ調整されるもの (同図 9)、底部外面径が内面径や口径に比して小さく、底部が回転糸切り無調整のものなどがある (同図 10)。高台坏・盤には出尻底のものがある (同図 4)。また、SR132 では「宮城郡」と刻書された須恵器が多数出土している (同図 5)。これらの刻書須恵器は 8 世紀前半に位置づけられ、『続日本紀』天平神護 2 年 (766) の条にみえる「宮城郡」の用字を遡る資料として注目される。灰原では「宮木」刻書須恵器も出土しており、8 世紀前半段階には「宮城」「宮木」双方の記銘が用いられていたことが示された (文献 24)。

瓦は多賀城分類における細弁蓮花文軒丸瓦 310B (第 3 図 11)、均整唐草文軒平瓦 721B、丸瓦 II B-a、平瓦 II B・II C 類が出土している。これらは大沢・春日大沢瓦窯跡出土のものと同様の内容のため詳細な記述は省略するが、本窯跡の平瓦は平均的な大きさが広端幅 27cm、狭端幅 24cm、長さ 38cm 程と大沢窯跡のものより大きく、調整に凹型台を用いる平瓦 II B 類の比率が 7 割と高くなっている (文献 15)。

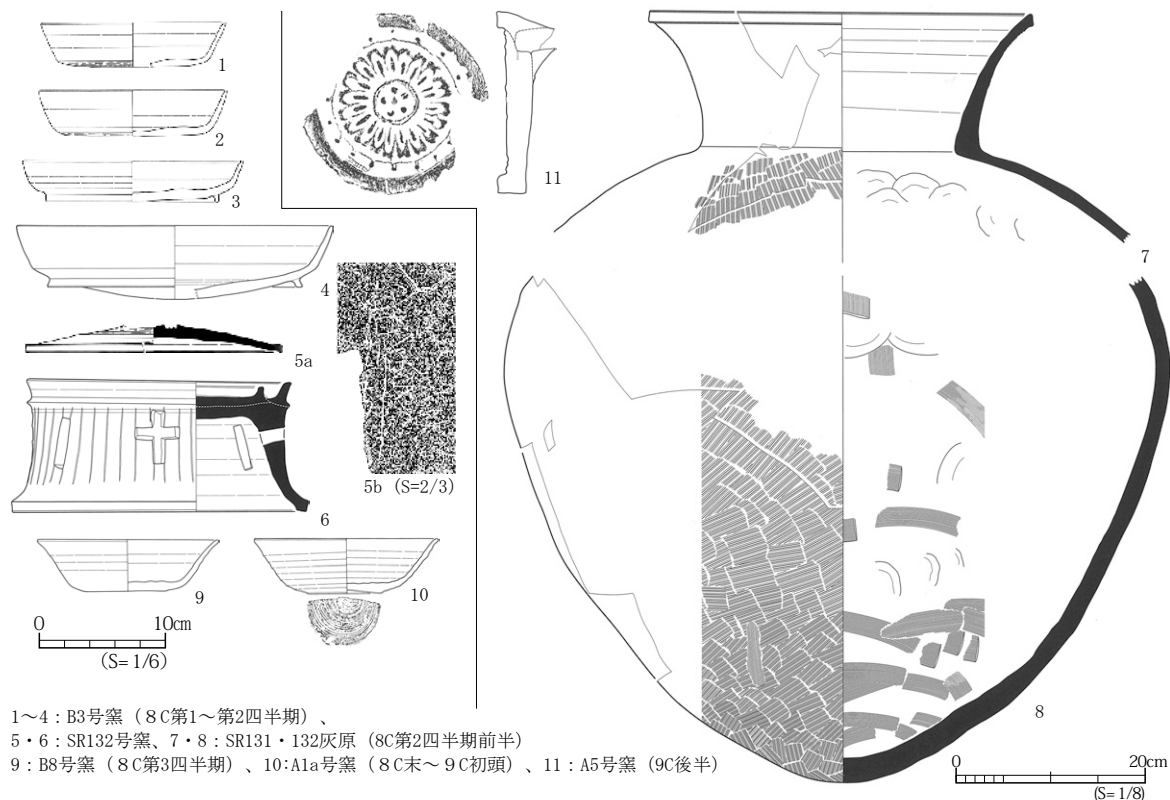
#### 系譜・供給先

本窯跡は 8 世紀代に須恵器窯、9 世紀代に瓦窯、8～10 世紀に木炭窯が構築されており、創建期以降の多賀城を支えた重要な生産拠点として捉えられている。本窯跡や周辺の大沢窯跡・大貝窯跡等の調査でも須恵器窯・瓦窯・木炭窯が多数発見され、春日窯跡群が多賀城を中心とする当該期の都市域に須恵器・瓦などを継続的に供給した、一大生産地であったことが明らかとなった (文献 24)。平面形が短冊形の須恵器窯は陸奥国府直営窯で多用されるが (文献 8)、B 3 号窯は湖西窯 (静岡県湖西市) の「局部有段構造」に出自をもち、製品にも出尻底高台などの東海系要素が認められる (文献 1・8・18・26 など)。また、SR122・123 のような横口付木炭窯は瀬戸内海沿岸や畿内、関東地方、福島県浜通り、宮城県山元町でも確認されている (文献 24)。これらの窯構造は多様な工人系譜や技術伝播のあり方を反映するものとして注目される。

※関連文献は「大沢窯跡・春日大沢瓦窯跡」を参照

遺構名	構造	性格	年代	窯体長	焼成部幅	燃烧部幅	煙道	床面傾斜	床面枚数	特 徴
A1a 号窯	半地下式	須恵器窯	8C 末～9C 初頭	8.8m	1.2m	1.1m	-	23°	1	
A1b 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期	(4.9m)	1.4m	1.3m	-	25°	1	
A2 号窯	地下式	須恵器窯	8C 前半	(3.5m)	1.2m	-	直立	19°	1	
B2 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期	8.2m	1.8m(1 次床) 2.5m(2 次床)	1.2m	直立	25°	2	焼成部 2 次床面に土坑・ピット・横方向の溝あり。 焚口～前庭部に排水溝
B3 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 1～第 2 四半期	7.3m	1.9m	1.1m	直立か	33°	1	燃烧部床面奥部に 10 条以上の溝を掘り、階段状にする。地形から直立煙道か(文献 8)
B4 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期	6.2m	1.8m	0.8m	直立	17°	2	
B5 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期	5.8m	1.7m	0.9m	-	25°	1	前庭部を深く掘り込んだ後、燃烧部・焼成部を横方向に掘り抜く。 焼成部～焚口床面の壁沿いに排水溝
B7 号窯	不明	須恵器窯	8C 前半	(2.0m)	0.8m	-	-	-	1	
B8 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 3 四半期	7.5m	2.3m	1.0m	直立	18°	2	窯廃棄後、焼成部の空間を B2 号住居の張り出し部として再利用
B9 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 3 四半期	9.1m	1.4m	0.8m	-	24°	1	B9 号窯← B16 号窯。前庭部に排水溝
B10 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期	6.1m	1.3m	1.0m	直立	27°	1	焼成部先端にのみ細い周溝あり
B14 号窯	地下式	須恵器窯	8C 前半	6.0m	1.9m	1.1m	直立	24°	1	B14 号窯→ B4 号住居。前庭部に排水溝
B15 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2～第 3 四半期	5.4m	1.7m	1.0m	直立	20°	1	焚口～前庭部にかけて、右壁沿いに排水溝
B16 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 1～第 2 四半期	8.1m	2.3m	1.1m	直立	17°	1	B16 号窯→ B9 号住居 燃烧部～前庭部に排水溝(左壁沿い)
B17 号窯	地下式	須恵器窯	8C 前半	(1.9m)	1.0m	0.6m	-	-	1	
B18 号窯	地下式	須恵器窯	8C 前半	(2.9m)	1.3m	1.1m	-	-	1	
SR131 号窯(旧)	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期前半	(7.03m)	1.27m	0.86m	-	24°	1	焼成部側壁にスサ入り粘土を貼り付け、焚口を造り替え。前庭部に排水溝
SR131 号窯(新)	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期前半	(3.95m)	1.13m	-	直立	19°	1	奥壁付近の堆積土から被熱した礫が多数出土(排煙口の閉塞に用いたものか) 排煙口の斜面上方に SD134 溝状遺構 木炭窯に転用?
SR132 号窯	地下式	須恵器窯	8C 第 2 四半期前半	5.91m	1.27m	0.66m	直立	28°	1	排煙口付近の堆積土から被熱した礫が多数出土(排煙口の閉塞に用いたものか) 排煙口の斜面上方に SD135 溝状遺構 天井構架材あり。
A4 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第 IV -1 期	(3.6m)	1.0m	(0.8m) ※焼けた痕跡	-	22°	1	外周溝あり(A5 号窯のものとは一体か)
A5 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第 IV -1 期	7.9m	0.8m	1.0m(1 次) 0.7m(2 次)	-	26°	2	外周溝あり(A4 号窯のものとは一体か) 2 次床面上では瓦片により焼台構築
A6 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第 IV -1 期	6.4m	0.8m	0.8m	-	20°	1	外周溝あり(A5・A8 号窯の外周溝を一部共用)
A8 号窯	半地下式	瓦窯	多賀城政庁第 IV -1 期	7.0m(1 次) 6.3m(2 次)	0.6m	0.7m(1 次) 0.6m(2 次)	-	25°	2	瓦片を横方向の列に積み重ねた焼台を 8 段以上構築。外周溝あり(左半は A6 号窯と共用)

第 1 表 硯沢窯跡属性表(文献 7・15・22・24 より作成)



第 3 図 硯沢窯跡出土須恵器・瓦(文献 15・24 より作成)